令和元年６月１６日～８月７日
図書館４階展示コーナー

大阪芸術大学図書館所蔵品展

古画資料の魅力 その１　ー絵画の下絵、模写、画題からー

日本の美術史を辿ると、飛鳥や奈良時代以降、江戸時代の始めまで、中国や朝鮮半島の美術から大きな影響を受けてきました。鎖国の政策によってオランダと中国に限って交易した江戸時代においても、18 世紀には八代将軍徳川吉宗が洋書を一部解禁したことで蘭学が盛んになり、遠近法や陰影法は北斎や広重ほかの浮世絵師によって早々に取り入れられました。明治時代には欧米で開発され実用化されていた工業の理論や技術を学ぶために欧米からの専門家を招いて工業の近代化が進められましたが、絵画や彫刻、工芸などの美術界においても同様に学習がなされ、優れた作品が生まれたことはご存知の通りです。国の内外を問わず、優れたものに興味を抱き、それを学び、吸収して自らの糧としていく包容力は日本文化の個性であると言えます。

今回の展示は、その具体例として古画の資料、つまり下絵や模写あるいは画題を対象にして、その魅力を２回に分けて見ようとするものです。作品は絵師たちの修練の成果であり、作品に関する下絵や模写、画題には、日本の風土に根ざした美意識の一端が示され、それとともに、手本となった中国絵画を自家薬籠中に組み込み、消化した痕跡もありありと見ることができます。

賢聖障子名臣像古図　江戸時代

伝狩野永徳筆屏風下絵　江戸時代

御所での儀式の場を飾る「賢聖障子（けんじょうしょうじ）」に採られた中国古代の賢人や聖人の姿、屏風に描かれた中国の故事などには中国絵画の受容のあり様がわかります。また江戸城西丸大奥の襖の鷹狩図、あるいは四季折々の風情を描いた景物画からは日本的な感性の投影が感じられます。

これらの古画資料からは外来文化を学び、絵画の伝統を築いた絵師たちの懐の深さも見えてくることでしょう。

大岡周卜筆　屏風下絵巻　江戸時代

江戸城西丸大奥襖下絵　江戸時代

（大阪芸術大学　美術学科教授　河田昌之）